

○奈良県ゆかりの植物



県の木「スギ」昭和41年指定

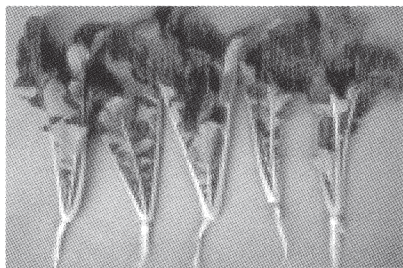


県の花「ナラノヤエザクラ」昭和43年指定



ヒトリシズカ（天川村提供）

万葉集で「つぎね」という名前で詠まれた植物です。別名のヨシノシズカは、花を吉野山に舞う静御前の姿に見立てたものといわれます。



大和まな

中国から渡来した漬け菜は、古事記に「菰（すずな）」と記載があるように、わが国の中で最も古い野菜の一つです。大和まなは漬け菜の一つで原始系に近い品種とされています。

（5）奈良県のニホンジカ

「奈良といえばシカ」といってもいいほど、ニホンジカは奈良県になじみ深い野生動物です。奈良公園の風景にとけ込んで、わが国では数少ない優れた動物風景を生み出す存在として、奈良公園一帯のニホンジカは国の天然記念物「奈良のシカ」に指定されています。

一方、昭和60年頃から全国的にニホンジカの生息域が広がるとともに、生息数も増えていきます。奈良県では現在、奈良盆地の周辺から大台ヶ原や大峰山系の標高が高いところまで広い範囲に、57,000頭ほどのニホンジカ（ただし、天然記念物「奈良のシカ」である旧奈良市のニホンジカは除かれている）が生息していると推計されています。農林業被害が発生しないとされる適正な生息数は約6,700頭と推定されており、現在の生息数はこれをはるかに上回っています（平成23年度 県森林整備課調べ）。この原因として、里地里山に住む人々が減少しニホンジカを追い払う力が弱まったことや、耕作放棄地が増加しニホンジカにとっての餌場や隠れ場所が増えたこと、狩猟をする人々の減少・高齢化が進み狩

猟圧が低下したこと、地球温暖化によって積雪量が減少することでニホンジカの死亡率が下がったことなどが考えられています。また、ニホンジカの捕食者であるオオカミが絶滅したこともその要因の一つとされています。

もともとニホンジカは草地のある低い山地を中心に生息する動物です。生息域が標高の高いところまで広がったことで、これまで食べることのなかった高標高域の植物も食べるようになりました。また、もともと生息していた地域でも、生息密度が高くなることで餌不足になり、今まで食べなかった植物も食べるようになりました。この結果、森林の下層に生えている草木が全くなかったところもあります。奈良県では、大台ヶ原・大峰山系の原生林や奈良公園内の春日山原始林などに大きな影響が現れています。このように、ニホンジカは保護される側面と害獣としての側面、相反する二つの側面を持ち、その管理体制が課題となっています。

①大台ヶ原のニホンジカ

大台ヶ原は標高1,300～1,695mに位置し、その名が示すように緩やかな台状地形を形成し、周縁部は急な崖となっています。年間の平均降水量が4,000mmを超え、屋久島と並ぶ多雨地である一方で、年平均気温は6℃と北海道内陸部に匹敵する寒冷地でもあります。周辺地域のほとんどがスギ・ヒノキの人工林と落葉広葉樹の二次林に変わっていった中で、国内分布の南限であるトウヒの純林や西日本で最大規模のブナ林など、原生的な自然林が孤立した状態で残されています。そのため、生物多様性の高い国内有数の地域なのですが、近年、残念ながらそうとはいえない状況になりつつあります。今から50年前のトウヒ林では、地表にコケが一面に生えており、枝や葉も鬱蒼^{うっそう}と茂っていました。しかし現在、コケに代わってミヤコザサが繁茂し、林床植生が単純化しているところが多くあります。一部のトウヒ林ではトウヒがすっかり枯れてしまい、森だとはとてもいえない状態



大台ヶ原 正木峠
かつてはトウヒ林でしたが、現在はミヤコザサ草が広がっています。

に変わり果てています。ブナ林ではスズタケというササが林床を広く覆っていたのですが、現在スズタケは消失しつつあります。このようになった大きな要因は、ここに高密度で生息しているニホンジカだと考えられています。

昭和30年代のいくつかの大型台風の襲来や昭和30年代後半に周辺域で行われた大規模造林により、多くの樹木が倒されました。その結果、地表には草木が繁茂しました。ニホンジカにとっては餌が増え、好適な

環境になったといえます。この餌の増加が、このあたりのニホンジカの増加の発端となったといわれています。先に述べたような狩猟者の減少や地球温暖化による積雪量の減少は、その個体数増加に拍車をかけたとされています。

ニホンジカの食害のために、メタカラコウやニセツクシアザミなどの希少な植物が多く失われてしまいました。林床からササ類が消えてしまった森林では、小動物の餌が減ったり、コマドリなどの鳥の生息場所がなくなったりと、動物相を含めた生態系全体に高密度化したニホンジカの影響がおよんでいます。皮剥ぎにより樹木が枯死し、また、次世代を担う後継樹も育っていないため、このままでは森林自体がなくなってしまうかもしれません。ニホンジカが原因でササ類が枯れてしまい下層植生に乏しい森林や、後継樹が見あたらない森林は、大台ヶ原に限らず大峰山系や^{おぼこ}伯母子山地でも広がっています。^{はつきょう}八経ヶ岳周辺に群生していたオオヤマレンゲは、その生育地が天然記念物に指定されていますが、ニホンジカの食害により絶滅に近い状態となっています。そのほかにも天然記念物である「^{ぶつきょうげん}仏経嶽原始林」のシラビソをはじめ、シモツケ、クルマユリ、オシダなど、多くの植物が食害を受けており、大峰山系も大台ヶ原と同様、深刻な状況です。このようなニホンジカによる植生への影響は、奈良県内だけでなく、滋賀県高島市^{くつき}朽木や京都市左京区^{くた}久多、高知県山嶺山系、神奈川県^{さんれいさんけい}丹沢地方や栃木県奥日光地域など日本全国各地で見られます。



大峰山系の森林の状況

下草がほとんどない上に、ニホンジカが首を伸ばすことができる高さまで葉などがすべて食べられており、ブラウジングライン（ディアライン）といわれる線が形成されています。

増えすぎたニホンジカによる食害は深刻な問題ですが、ニホンジカも生態系の一員であり、重要な役割を果たしています。もしニホンジカがいなくなればササが繁茂してしまい、若木が光不足のために枯れてしまいます。この状態でも森林更新は進みません。今後、生態系のバランスをとりながら適正な密度に管理する順応的管理のもと、人と自然が調和し、持続的に自然の恵みを享受するための施策を実行していく必要があります。



大台ヶ原の^{ぼうろくさく}防鹿柵
ニホンジカによる食害から植物を守るために
設置されています。



大峰山系の防鹿柵（環境省提供）
オオヤマレンゲを保護しています。

②奈良公園のニホンジカ

奈良公園一帯のニホンジカは、古来より^{しんろく}神鹿として保護されてきました。それにより、
個体数が増え、角による人身被害や^{とうろう}灯籠の破壊が多かったため、寛文11年（1671年）か
ら角きりが始まりました。その後、明治時代に入ると混乱などから、一時、わずか38頭ま
で激減したといわれています。また、第二次世界大戦後にも79頭まで再び減少しています。
その後は、懸命な努力により個体数は増加しました。昭和32年には天然記念物「奈良のシ
カ」に指定され、現在は約1,100頭が生息しています（平成24年度 財団法人奈良の鹿愛
護会調べ）。

奈良公園のニホンジカが神鹿として保護されてきたのと同様に、春日山原始林も古来よ
り春日大社の聖域としてほとんど斧を入れず、9世紀頃には
禁伐令が出されるなど、保護がなされてきました。現在の日
本では国土面積の2%にも満たない原生状態の照葉樹林が、
市街地に隣接して広がっています。この森林は常緑広葉樹
（コジイ、カシ類）を主とした暖帯林を代表とし、暖地性の
カギカズラ（常緑性つる植物）やナチシダ（シダ植物）が生
育する一方、温帯性のイヌブナ、ミズメなども混生しており、
800余種からなる多様な植物社会が形成されています。昆虫
類や鳥類などの動物も豊富に生息していることから、春日山
原始林は原生的状態を維持している貴重な存在として、昭和
30年、特別天然記念物に指定されました。さらに、平成10
年には、春日大社をはじめとする文化遺産と一体となって良



春日山原始林（国の特別天然記念
物）
コジイ、ツクバネガシ、ウラジロ
ガシなどの常緑広葉樹からなる照
葉樹林が成立しています。

好な景観を形成することから、世界遺産（文化遺産）に登録されました。

ニホンジカは奈良公園の植物にさまざまな影響を与えています。美しい芝生は、ニホンジカが芝や競合する植物を食べることにより保たれています。その反面、現在の生息数は餌となる芝の量から推定される適正生息数より多いという指摘もあり、春日山原始林ではニホンジカの採食、角研ぎ、皮剥ぎにより、樹木や下層植生が大きなダメージを受けています。



皮剥ぎの被害を受けたヤブツバキ

生物多様性の劣化が進んでおり、森林の主要な構成種であるコジイ、カシ類の後継樹も乏しい状況です。今のところはまだ豊かに見える森林ですが、主要構成種の後継樹が育っていないということは、現在の上層木が寿命や台風などにより倒木した場合、照葉樹林が維持されない可能性が高いということを意味します。

一方、在来種のイワヒメワラビ、国内外来種のナギや国外外来種のナンキンハゼなど、ニホンジカが採食しない植物は増加しています。ナギは日本では四国や九州などの海岸付近に自生する種であり、このあたりで見られるナギは約1,200

年前に春日大社に献木されたものが起源と考えられています。特別天然記念物春日山原始林の指定地域西側に隣接する御蓋山^{みかさやま}には、ほぼ純林状のナギ林が成立しています。このような純林のナギ林は世界的にも珍しいことから、一部が天然記念物に指定されています。また、ナンキンハゼは中国原産の種です。昭和の初め、紅葉が美しいことから奈良公園に植栽され、その後、鳥による種子散布によって分布を広げました。これらの植物の競争相手となるはずの在来の植物はニホンジカによって少なくなっているため、これらの植物は増加する一方です。今後、この2種の外来種が春日山原始林内で拡大を続け、春日山原始林の生態系を大きく変化させる可能性があります。



春日神社境内ナギ樹林（国の天然記念物）

このように、ニホンジカは若草山や飛火野といった本来の餌場である草地だけでなく森林まで生息域を広げ、春日山原始林に影響をおよぼしています。文化的シンボルである「奈良のシカ」と「春日山原始林」の双方が共存する道を見いだし、次の世代に引き継いでいかなければなりません。